

Liscicul Network

News Letter

No. 9 (2023.4)



Contents

- 理事長ご挨拶・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・早川あけみ・・・ 2
- ライサ設立 10 周年記念講演会より
 - 人と AI が共存する健康医療社会の創生・・・・・・・・・・・・・・・・水野正明・・・ 3
 - 肺がん外科治療のこれから-高齢化時代を迎えて-・・・・・・・・櫻井裕幸・・・ 4
 - デジタルトランスフォーメーションで目指す創薬イノベーション・・・・・・・・奥野恭史・・・ 5
 - 科学・文化と日本の将来・・・・・・・・・・・・・・・・武田邦彦・・・ 5-6
- 会員の皆様に伝えたい ～ライサメッセージ～
 - 癒やし空間・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・今泉康代・・・ 6-7
 - ライサへの感謝・・・・・・・・・・・・・・・・竹村久仁子・・・ 7
- 編集後記・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・鈴木治彦・・・ 8

理事長ご挨拶

一般社団法人生命科学文化推進機構 理事長 早川あけみ

僭越ではございますが当機構を代表して会員の皆様にご挨拶申し上げます。

この度、生命科学文化推進機構のニュースレター第9号を発刊するにあたり、関係者の皆様に心より感謝いたします。

実は昨年、9月に新型コロナ感染渦の中、不安を抱きながらも無事に設立10周年記念講演会を終える事が叶いました。講演会では多くの皆様方よりご協力を頂き、紙面をお借りし、心から御礼申し上げます。

さて、新型コロナ感染は落ち着きつつも感染対策の生活を余儀なくされていますが、国外情勢ではロシアのウクライナ進攻による悲惨な情況は未だに収束が見えないままです。

一方、国内に目を向ければ物価高や光熱費の高騰などの影響で不透明な社会生活を過ごす中、弱者がしわ寄せとなり、今こそ政治家の手腕が問われる時と思われます。

不透明な現代社会に問われる生き方を提言された恩師T先生との出会いは自身の人生に良き転機を導いて頂きました。今は亡き恩師T先生が出版された書籍「科学と宗教、科学的な物の見方・考え方」の冒頭の一部を抜粋します。

『人は何をどのように見るべきか、また、何を学び、何を考えるかについては常に正しい知識を持つ事が大切である。物の見方には主観的見方と客観的見方とがあり、科学の世界はあくまで客観的見方が要請されなければなりません。科学的思考は客観的対象に対する論理の道筋を辿るものでその結論は学問に裏付けられる体系を持ち、科学的事実を客観的に納得されるものでなければならぬのです。科学は知性の世界とすれば、意識の働



く世界は感性の世界とみることができます。またそれは心の世界とも考えられます。科学的な真実は合理の世界、理性の世界であり、常に透徹した深い思慮と直観が必要なのです』

一研究者として、とても感銘を覚えました。

厳寒の夜空にひとときわ輝く一番星を見ながら未来の可能性に賭ける想いが込み上げ、ライサ活動を介し、社会に貢献できるために一層の努力してまいります。

本年も何卒、ご指導、ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

令和5年2月吉日



ライサ設立 10 周年記念講演会より

ライサ設立 10 周年記念講演会が、令和 4 年 9 月 18 日午後 1 時よりサイプレスガーデンホテルにて開催されました。

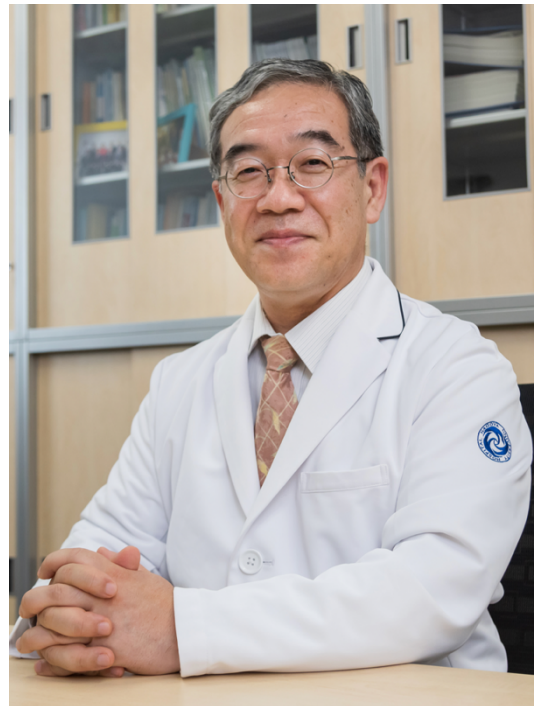
特別寄稿 「人と AI が共存する健康医療社会の創成」

名古屋大学医学部附属病院 先端医療開発部 センター長 水野正明 先生

700 万年前、サルに比べ胃腸が弱かったことが一因となり、やがて思いやりと感謝の心を育むようになった人類。その究極の目的は人の幸せ、社会の幸せである。そしてその目的を達成するためにこそ「医療」があると思ってきたが、現代医療はそうではなくなっている。現代医療は人を離れ、臓器へ、組織へ、細胞へ、そして遺伝子へとからだを微分し続ける、いわゆる「微分の医学」に取って代われ、その医学の進歩こそが医療の進歩と勘違いしてしまった。医学と医療は違うのだ。岡本太郎さんはそれをひどく嘆いたと私は思う。

ここに一石を投じることになったのが、AI、ICT、医療ビッグデータである。これらはがんにおいては精密医療（Precision medicine）を可能にし、リアルワールドデータの活用を現実のものとした。その結果、人のからだを微分し続けた、いわゆる「微分の医学」に代わる「積分の医学」を可能にし、臓器や組織や細胞や遺伝子だけでなく、改めて「人」を「人」として見る「医療」を再興しつつある。この流れはやがて 5000 年以上に渡り「人」だけを見続けてきた「東洋医学」との融合を果たし、人間の究極の目的である人の幸せ、社会の幸せと向き合える機会を生み出してくれるかも。

人には人にしかわからない気づきがある。一方で AI には AI にしかわからない気づきがあり、AI はそれを人に伝えてくれる。人と AI が共存する健康医療社会とはそういった互いを補完し合う社会であり、真っ直ぐに人の幸せ、社会の幸せに向かうものでなければならない。私はそう思う。



人と AI が敵対せず、互いに互いを大事にし合う社会の誕生は近いかもしれない。一方で、イギリスの理論物理学者であるホーキング博士が残したことば、すなわち「AI の発明は人類史上最大の出来事だった。だが同時に、『最後』の出来事になってしまう可能性もある」をよくよく肝に銘じ、最先端テクノロジーと向かい合いたい。

そのためには AI に決して支配されない人の育成が急務である。「人とは何か」「真の医療とはなにか」そして私を含めた医者にとっては「真の医者とはなにか」を真剣に問うことが求められている。

今一度、人と AI が共存する健康医療社会とは何か。皆さんと語り合いたいと思う。

特別寄稿 「肺がん外科治療のこれから ～高齢化社会をむかえて～」

日本大学医学部外科学系呼吸器外科学分野 主任教授 櫻井裕幸 先生

我が国における高齢者の割合は年々増加の一途をたどっており、65歳以上人口は、昭和25

(1950)年には総人口の5%に満たなかったが、45(1970)年に7%を、さらに、平成6(1994)年には14%を超え、高齢化率はその後も上昇を続け、令和2(2021)年においては、36%に達している。さらに、我が国の80歳の平均余命を見ても年々延長し、今や約10年の余命が期待できる現状にあり、高齢化率は今後も上昇し続けることが予測されている。

肺がん外科治療においても、最新の日本胸部外科学会学術調査によれば、我が国の2018年の原発性肺がん切除例は44,859例であり、年齢別では70歳以上が59%、さらに、80歳以上は14%を占めていた。原発性肺がん切除例に占める高齢者の割合は年々増加傾向にあり、手術症例の高齢化率も上昇続けている。

高齢者においては、認知能力・体力の格差が拡大し、脳・血管障害、糖尿病など複数の疾患を伴っていることも多く、また、喫煙による高度の気腫性肺の変化で低肺機能に陥っていることも多い。高齢者の肺がん手術を施行するにあたっては、病期診断はもちろんのこと、並存疾患の術前評価、機能温存を図る手術の低侵襲化、術後合併症を減らすための周術期管理の工夫、高齢者がん患者を取り巻く周囲の環境などを考慮し慎重な治療戦略をたてる必要がある。さらには、術後のQOLについての評価も必要であろう。

また、予後の面においては、高齢者では若年者に比べ、周術期の合併症率・術後死亡率が高くなること、肺がん死以外の他病死の割合が多くなること、および標準術式である肺葉切除と縮小手術(楔状切除・区域切除)において予後の差がないとする報告も散見されており、肺がんに対する治療方法の選択、外科治療においては手術術式の選択において考察する余地がある。

高齢者肺がんの臨床病理学的特徴、周術期管理の工夫、外科治療成績、高齢者に特有な予後因子など今後の研究結果の報告が待たれる。



最後に、この度はライサ設立10周年の記念すべき講演会での発表の機会を頂き、理事長である早川あけみ先生はじめ会員の皆様方、および、最初にお声をかけてくださった榎間勝利先生(私の出身大学の同級生で学生番号が隣でした!)に深く感謝申し上げます。ライサの今後のさらなる発展を心より祈念しております。



講演会後の記念撮影(右:私、左:榎間勝利先生)。このあと大学卒業以来の久しぶりの食事をしました(もちろん感染対策をしたうえで)。

講演要旨 「デジタルトランスフォーメーションで目指す創薬イノベーション」

京都大学 大学院医学研究科

人間健康科学系専攻 ビッグデータ医科学分野教授 奥野恭史 先生

日本の創薬の課題として、「デジタルトランスフォーメーションによって創薬イノベーションを目指す」ことがあげられる。具体的には、スーパーコンピューター「富岳」を用いてAIやシミュレーションで創薬の超効率化を諮る試みがなされている。「富岳」では薬剤がタンパク質にどのように結合するかを、タンパク質を動かしながら計算することが可能である。

この技術を応用して既存医薬品の中から、新型コロナウイルスの標的タンパク質に高い親和性を示す治療薬を探索・同定した。現在、治療薬剤候補としてニコロサミドの治験が行われている。



講演要旨 「科学・文化と日本の将来」

元中部大学特任教授 武田邦彦 先生

日本の文化は、弱い者を差別しない、全ての人を役割や性質に応じて等しく尊重する文化である。強い者が偉いのではなく、生命を生み出し、人を幸せにする存在が偉いという社会である。

日本人は元来母性を大切にしてきた。給料が現金支給の時代は、男性は給料袋をそのまま妻に渡していた。男性は、小遣いをもらい、社食か弁当を食べる。妻が家庭を守ってくれるのに感謝し、昼に妻がお寿司を食べても気にしない。役割分担の社会である。

世界で戸籍制度がある国は少ないが、戸籍制度によっても妻の権利は守られた。

男女の差別は、外国に比べて極めて少ない。一部の先進国のように、性差や特性を踏まえないで軍務や力仕事を女性にさせることは平等ではない。それぞれにしかできない、それぞれに合った役割、仕事がある。

平安時代、女性で紫式部、清少納言が本を書いたが、当時、外国にはそういう例はない。日本



の女性は世界のトップを切って社会に進出していた。進出できる社会だった。

日本の最高の神様は女性性を持った天照大御神であるが、外国では戦争の神や強さを誇示する神々がほとんどである。

リフレッシュといえば、先日、友人に頼まれて上野動物園のパンダのシャンシャンが中国に帰るからと観覧申込をしたら見事に当選し、先日観覧しましたが、こちらは観覧時間は2分。のんびりとはできませんでしたが、最悪、寝ている場合もあるという状況の中、幸い、元気に笹を食べてくれたので可愛い様子を見ることが出来、短時間でも癒やされました(笑)

東京都民としては、パンダに1億円というのは若干複雑ではありますが、都立の施設だからこそ、誰もが気楽に行くことができ、大人も癒やされる場所が大切ですよねと思うことにします…

皆様もまだまだコロナ対策が必要な中で、精神的にも疲労が蓄積すると思いますが、是非、心のリフレッシュは大切になさって下さい。



「ライサへの感謝」

当法人評議員 竹村久仁子

1959年9月25日私の11才の誕生日は近所の友達をお呼びして楽しく過ごしました。

伊勢湾台風が名古屋を直撃し南区、港区にも防波堤を高潮が乗り越え、多くの家が流され海水の下となり、多くの人が亡くられました。港区にある名古屋市立中川小学校も被害を受け、友達ともしばらく会えない日々(半年くらい海水がひきませんでした。)が続きました。

時を経て1973年4月東京女子医大を卒業し、港区医師会長をしていた父に呼び戻され、中部労災病院で研修する事となり、翌74年から名大医学部産婦人科教室に所属する様になりました。

その間1974年に結婚、2児を出産、満足な仕事もできず名大の御役にはたてなかつたと思います。

78年 夫(中部労災病院内科勤務)の父が死亡の為、奈良県の広陵町百済の医院(室町時代から続くと言われている)継承の為、泣く泣く2人の娘(3才と1才)を連れて奈良県の田舎へ行く事となりました。

父(産婦人科医)の姿を見て、手助けできたら・・・

と、産婦人科を志したのに、名古屋を離れることとなりました。

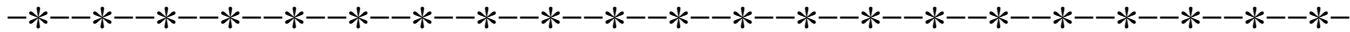
医学は日々進歩しています。1981年頃から育児

が少し楽になった頃、奈良県立医科大学産婦人科へ入局させて頂き、天理市立病院、天理よろず相談所病院、奈良県不妊症相談の仕事させて頂きました。

ライサに参加させて頂いておりますが、ライサでは沢山教えて頂いており、感謝しております。

ライサの益々の御発展を祈念しております。





編集後記

ライサニュースレター第9刊を無事発行できましたことを喜ばしく思います。ライサの歴史も10年を超え、昨年9月には10周年記念講演会を開くことができました。今号の主体は10周年記念講演会の要旨となりますが、ご講演いただいた先生方に新たに講演内容に即した特別寄稿の執筆をお願いさせていただきました。水野先生、櫻井先生には快くお引き受けいただき心より感謝申し上げます。誠にありがとうございました。また、ライサメッセージをお二人の女性評議員にお願いしました。今号では、その他のコーナーを設ける余裕がございませんでした

が、次号からはまた「私の趣味」などのコーナーも復活させていきたいと考えております。ライサニュースレターは会員の皆様の寄稿によって成り立っております。どうか寄稿依頼の際は、一筆ご寄稿いただけますようよろしくお願い申し上げます。

本号の表紙絵は、神田評議員の伯父様の作品です。柔らかい陽射しの中の水面に映る建物や石橋がとてもきれいな風景画で、心洗われるような作品ではないでしょうか。

鈴木治彦

事務局だより

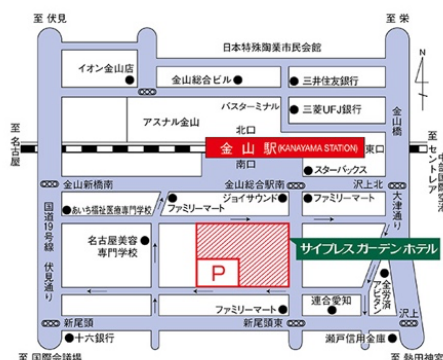
令和5年度総会（第10回定時総会・第11回理事会・評議員会）

：令和5年6月4日（日）午後2時～

サイプレスガーデンホテル 3階会議室

第7回ライサアカデミア講座：令和5年9月17日（日）午後1時～

サイプレスガーデンホテル 3階会議室



一般社団法人 生命科学文化推進機構 事務局

E-mail office@liscicul.or.jp

